KURENAI : Kyoto University Research Information Repository

Title	華夷譯語丙種本『韃靼譯語』におけるモンゴル語について
Author(s)	越智, サユリ
Citation	京都大学言語学研究, 23: 115-144
Issue Date	2004-12-24
URL	http://hdl.handle.net/2433/87842
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Kyoto University

京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **23** (2004), 115-144

華夷譯語丙種本『韃靼譯語』におけるモンゴル語について

越智サユリ

0. はじめに

中世モンゴルの口語を記した文献としては、漢字音写文献、アラビア文字音写文献、パスパ文字文献などが存在するが、このうち最も分量が多く中世モンゴル語研究の中心となっているのは漢字音写文献である。主な漢字音写文献としては、歴史書である『元朝秘史』[1]と「華夷譯語」と呼ばれる一連の対訳語彙集が挙げられる。

「華夷譯語」は明・清時代に編纂された漢語と周辺諸言語の対訳語彙集の総称であり、馮(1981: 57)によれば編纂年代や体裁によって甲・乙・丙・丁の 4 種類に分類されるという。このうちモンゴル語が扱われているのは甲[2]・乙[3]・丙の 3 種であるが、これらにおける漢字音写の方法は同じではない。丙種本は他の 2 種や『元朝秘史』とは異なり、実際にモンゴル語を話す必要のある通訳官の学習のために書かれたと考えられているため、他の文献よりも実際の口語に近い音を表しているのではないかと予想される。本稿では丙種本『韃靼譯語』における漢字音写の体系を示し、『韃靼譯語』に表されたモンゴル語の特徴について述べる。

1.『韃靼譯語』について

1.1 体裁

『韃靼譯語』は華夷譯語丙種本[4]のうちの漢語・モンゴル語対訳部分の名称で

---

1 元の太宗の 12 年(1240 年)にモンゴル文字によって書かれたと伝えられているが、現存するのは 14 世紀後半に漢字音写された形式のものである(小澤 1994: 190)。補助記号を用いるなどの精緻な音写方法をもつ。

2 明の洪武 15 年(1382 年)に編纂されたもので対訳語彙集と例文からなる(栗林編 2003: i)。漢語と漢字音写されたモンゴル語のみで、モンゴル文字による文語表記はもたない。音写方法は『元朝秘史』のものに酷似している。

3 明の永楽 5 年(1407 年)に置かれた外国語文書の翻訳機関である四夷館（後に清朝の四訳館）において編纂された一連のものを指す(栗林編 2003: i)。対訳語彙集と例文からなり、漢語と漢字音写されたモンゴル語の他にモンゴル文字による文語表記をもつ。

4 完本は、朝鮮・琉球・日本・安南・占城・暹羅・韃靼・畏兀児・西番・回回・満剌加・

ある。丙種本は明・清時代に外国使臣の接待を行った会同館[5]で館員の外国語学習のために編纂されたと考えられている(栗林編 2003: i)。体裁は上段に漢語、下段に漢字音写したモンゴル語を配したものであり、モンゴル文字による文語表記や例文をもたない。総項目 959 は意味的に 17 の部門に分類されており[6]、その中には甲種本や乙種本に含まれていない語も多く見られる。『韃靼譯語』の書誌情報等については石田(1931, 1944)に詳しい。

1.2 異本

石田(1944: 53)によれば、異本としては「静嘉堂文庫蔵本」(以下「静嘉堂本」),「徳島市光慶図書館蔵古阿波国文庫本」(以下「阿波国文庫本」),「故稲葉岩吉博士蔵本およびその転写本」(以下「稲葉氏本」),「ハノイ極東フランス学院蔵本」(以下「ハノイ本」)の 4 種が存在するという。今回はハノイ本以外の 3 種を参照することができた[7]。「阿波国文庫本」と「稲葉氏本」は酷似している[8]。「静嘉堂本」は「阿波国文庫本」「稲葉氏本」における飲食門の「膏糜」から「酸酣」までの 14 項目をもたず、また「阿波国文庫本」「稲葉氏本」にはない項目を 3 つ含んでいるといった違いがある[9]。

1.3 音写に用いられた漢字音

漢字音写によって表されたモンゴル語音を知るためには、まず音写に用いられた漢字の当時の発音を推定する必要がある。本稿では、明の萬暦 34 年(1606 年)に刊行された徐行撰「重訂司馬温公等韻図経」の再構音を利用する。これは、『韃靼譯語』と非常に類似した音写方法をもつ華夷譯語丙種本『畏兀児館譯語』を扱った庄垣内(1983)の方法に従ったものである。「重訂司馬温公等韻図経」から再構される声母と韻母は以下の通りである[10]。

女直・百夷の 13 カ国語を含むと言われている(石田 1944: 42-43)。

[5] 乙種本が編纂された四夷館に翻字官が置かれていたのに対して、丙種本が編纂された会同館には通訳官が置かれていたという(石田 1944: 41)。

[6] 総項目 959 は「阿波国文庫本」「稲葉氏本」の 956 項目に「静嘉堂本」のみに見られる 3 項目を加えた数である。

[7]「阿波国文庫本」は京都大学文学部所蔵の写真を、「稲葉氏本」は京都大学文学部所蔵の転写本を利用した。

[8] 冒頭の部門名「天文門」を「天門文」とする誤記も「阿波国文庫本」と「稲葉氏本」に共通して見られる。

[9]「静嘉堂本」のみに見られるのは「熱」蛤剌温,「葫蘆」蛤把,「下」朶剌 の 3 項目である。

[10]「重訂司馬温公等韻図経」の再構音は陸(1947[1988])を利用した。

声母	p(幫) p^h(滂)	t(端) t^h(透)		k(見) k^h(渓)	·(影)
		ts(精) ts^h(清)	tʂ(照) $tʂ^h$(穿)		
	f(非)	s(心)	ʂ(審)	ʐ(稔)	x(暁)
	m(明)	n(泥)			
		l(来)			

韻母	əŋ	iŋ	uŋ	iuŋ	(通摂)	
	ɿ	ɻ	i	y	ər	(止摂)
	u	iu			(祝摂)	
	ai	iai	uai		(蟹摂)	
	ei	uei			(壘摂)	
	au	iau			(効摂)	
	ɔ	iɔ	uɔ		(果摂)	
	a	ia	ua		(假摂)	
	ɛ	iɛ	uɛ	iuɛ	(拙摂)	
	ən	in	u(ə)n	iun	(臻摂)	
	an	iɛn	uan	iuɛn	(山摂)	
	aŋ	iaŋ	uaŋ		(宕摂)	
	əu	iəu			(流摂)	

1.4 モンゴル語の再構方法

『韃靼譯語』に表されたモンゴル語形式を再構するために、まず音写に用いられた漢字そのものの音を上記の「重訂司馬温公等韻図経」から再構する[11]。例えば、「日」を意味するモンゴル語は‘納藍’と音写されているが、これに対して na lan という漢字音が再構される。次に、この漢字音形式と対応するモンゴル文語形式や現代諸方言形式を比較することによって、漢字音写が表そうとしたモンゴル語形式を推定する[12]。例えば、上記の漢字音形式 na lan と「日」を意味するモンゴル文語形式 naran を比較する。音写に用いられた漢語は ran という音連続をもたないため、類似した音である lan を用いてモンゴル語の ran を表そうとしていると考えられる。したがって、na lan が音写したモンゴル語形式は/naran/と再構できる[13]。

漢字音形式とモンゴル文語形式に大きなずれが見られる場合は、『韃靼譯語』における漢字音写体系全体を考慮してモンゴル語形式が推定される。例えば、「伴當」‘那可児’の漢字音形式は nuɔ k^hɔ ər であるが、モンゴル文語形式は nökür である。漢字音 k^hɔ は『韃靼譯語』全体において kö を表すために用い

11 「重訂司馬温公等韻図経」に存在しない漢字の音は、「中原音韻」を基に再構された近世音と現代北京音を参考に推定した。近世音、現代北京音は楊(1981), 寧(1982), 李・周編(1998)を利用した。

12 モンゴル文語形式、現代モンゴル諸方言形式は Lessing(1960[1995]), 小沢編(1994), 孫主編(1990)を利用した。

13 以下、// は再構形を表す。

られていることから、モンゴル語形式は/nökör/と再構できる[14]。

このような方法で再構されたモンゴル語音が漢字音とどのような音写関係にあるのかを2節以下で見る。

2. 漢字音写によって表されるモンゴル語の子音

2.1 音節初頭子音

『韃靼譯語』において、モンゴル語の音節初頭子音は半母音を除くすべてが漢語の声母によって表されている。

2.1.1 阻害音

2.1.1.1 両唇音

モンゴル文語は両唇閉鎖音としてbのみをもつ。『韃靼譯語』においても両唇閉鎖音はbであると仮定したい。モンゴル文語のbに対応する位置に現れる音はほぼすべて幇母 p· によって音写されている(1)[15]。以下の例では「漢語」, 漢字表記, 漢字音形式, /再構されたモンゴル語形式/, モンゴル文語形式(文) の順に挙げる。必要に応じて、甲種本漢字音写形式(甲), 乙種本文語形式(乙), 現代諸方言形式なども挙げる。

(1)「師傳」 把黑失 pua xɛ ʂʅ /baɣši/ (文) baɣši

「三」 忽児班 xu ər puan /ɣurban/ (文) ɣurban

通常、漢字音写文献ではモンゴル語の有声閉鎖音・破擦音を漢語の無気音声母で表し、無声閉鎖音・破擦音を有気音声母で表している。上記の例では基本的に無声音声母 p· が用いられているため、『韃靼譯語』の両唇閉鎖音を有声音bと再構することは妥当であると思われる。

2.1.1.2 歯茎音

モンゴル文語は無声と有声の歯茎閉鎖音t, dをもつ。『韃靼譯語』においてもt, dの2音をもつと仮定したい。『韃靼譯語』ではモンゴル文語のtに対応する音のほとんどが透母 t^{h}· によって表され(3)、dに対応する音のほとんどが端母 t· で表されている(4)[16]。漢語の有気音はモンゴル語の無声音を表し、無気音は

---

14 現代モンゴル語(ハルハ方言)の形式が nöxör であることも再構の手がかりとなる。

15 滂母 p^{h}· によって表される例も若干存在するが、条件は決定できない。

例:「大麥」 阿児拍 ·a ər p^{h}uai /arbai/ (文)arbai

16 aの前に現れるdは透母 t^{h}·で表されることが多く例外的である。用いられる漢字は'塔'

有声音を表すと考えられるため、『韃靼譯語』において透母 tʰ- が表す音を t, 端母 t- が表す音を d と再構することは妥当であると思われる。

(2)「載」帖額 tʰiɛ ·ɛ /teɦe/ (文)tege
「金」奄墦 ·iɛn tʰan /altan/ (文)altan

(3)「四」朶児班 tuɔ ər puan /dörben/ (文)dörben
「腸」格迭孫 kɛ tiɛ su(ə)n /gedesün/ (文)gedesün

モンゴル文語がもつ歯茎摩擦音は無声音 s のみである。『韃靼譯語』においても s をもつと仮定したい。モンゴル文語の s に対応する音はすべて心母 s- によって表されている(4)。心母 s- は他の漢字音写文献においても常にモンゴル語の s を表すために用いられることから、『韃靼譯語』でも s を表していると考える。

(4)「蒜苗」撒林撒 sa lin sa /sarimsaɣ/ (文) sarimsaɣ
「魚」只蛤孫 tʂɿ xa su(ə)n /ǰiɣasun/ (文) ǰiɣasun

モンゴル文語は有声の歯茎摩擦音や破擦音をもたないが、このような音を表すと考えられる例が存在する(5)。

(5)「筆」 兀租 ·u tsu /üzük/ (文)üǰüg (乙)üsüg
(畏[17]) 兀卒 ·u tsu /üzüg/[18]
「葡萄」兀遵 ·u tsu(ə)n /üzüm/ (文) üǰüm (乙) üsüm
(畏) 與俊 ·u tsiun /üzüm/
「市」把咱児 pua tsa ər /bazar/ (乙) basar (畏) 把雑児 pa tsa ər /bazar/

上記の例では精母 ts- が現代モンゴル文語の ǰ と対応しているが、『韃靼譯語』においてǰ は照母 tʂ- によって表されることから、ここでの精母 ts- がǰ を表しているとは考えにくい。これらの語はすべて丙種本『畏兀児館譯語』にウイグル語として記されている(庄垣内 1983: 142, 125, 113)。そこでの精母 ts- がウイグル語の z を表していることから、上記の『韃靼譯語』における精母 ts- はウイグル語からの借用語に現れる z を表した可能性がある[19]。また、この音は

---

tʰa のみであるが、この場合の‘塔’は他の漢字音写文献における‘荅’ta に対応している。例:「嶺」塔把安 tʰa pua ·an /dabaɦan/ (文)dabaɣan (甲) 荅巴安 ta pua ·an
「似」阿塔里 ·a tʰa li /adali/ (文)adali (甲) 阿荅里 ·a ta li

17 (畏)は華夷譯語丙種本『畏兀児館譯語』におけるウイグル語の例を表す。

18 /üzüg/という形式は庄垣内正弘先生との個人的談話による。

19 栗林編(2003)では甲種本に現れる精母 ts- を ʒ で転写している。『韃靼譯語』において

乙種本の文語表記における文字 s と対応するが、この点もウイグル語の z と一致している[20]。結論としては、『韃靼譯語』において精母 ts· が表す音は、当時の借用語に存在した z であるとする。その後、借用語がモンゴル語化するに従って z の代わりにモンゴル語の音韻体系に合う ǰ が用いられるようになったと考えたい。

2.1.1.3 後部歯茎音

モンゴル文語は無声と有声の後部歯茎破擦音 č, ǰ をもつ。『韃靼譯語』においても č, ǰ の 2 音をもつと仮定したい。『韃靼譯語』ではモンゴル文語の č に対応する音は穿母 tʂʰ· によって表され(6)、ǰ に対応する音はほぼすべて照母 tʂ· で表されている(7)。他の漢字音写文献において、反り舌音声母は基本的にモンゴル語の後部歯茎音を表すために用いられる。また漢語の有気音はモンゴル語の無声音を表し、無気音は有声音を表すことが多いため、『韃靼譯語』において穿母 tʂʰ· が表す音を č, 照母 tʂ· が表す音を ǰ と再構することは妥当であると思われる。

(6)「花」扯扯　tʂʰɛ tʂʰɛ　/čečěk/　(文) čečěg
　「芥」乞赤　kʰi tʂʰʅ　/kičі/　(文) kičі
(7)「打」占赤　tʂan tʂʰʅ　/ǰančі/　(文) ǰančі
　「蒿」失剌里真　ʂʅ la li tʂən　/širaǰin/　(文) širaǰin

モンゴル文語は後部歯茎摩擦音 š をもつ。『韃靼譯語』においても š をもつと仮定したい。モンゴル文語の š に対応する音は審母 ʂ· で音写されている(8)。他の漢字音写文献において、反り舌音声母は常にモンゴル語の後部歯茎音を表すため、『韃靼譯語』で審母 ʂ· が表す音を š と再構することは妥当であると思われる。

(8)「湯」晝連　ʂy liɛn　/šülen/　(文) šülen
　「平」土不申　tʰu pu ʂən　/tubšin/　(文) tubšin

2.1.1.4 軟口蓋音

モンゴル文語は無声と有声の軟口蓋閉鎖音 k, g をもつ。『韃靼譯語』においても k, g の 2 音をもつと仮定したい。『韃靼譯語』ではモンゴル文語の k に対応

精母 ts· が表した音も ʒ であった可能性はある。もしくは破擦音 dz であったかもしれない。

[20] 元朝時代のウイグル語草書体文字は文字 z をもたないため、z 音を文字 s で表記した。この表記法がそのままモンゴル文語に取り入れられたため、精母 ts· が表す z 音が乙種本のモンゴル文語における文字 s と対応していると考えられる。

する音はほぼすべて渓母 k^{h}- で表され(9)[21]、g に対応する音は見母 k- によって表されている(10)。漢語の有気音はモンゴル語の無声音を表し、無気音は有声音を表すと考えられるため、『韃靼譯語』において渓母 k^{h}- が表す音を k, 見母 k- が表す音を g と再構することは妥当であると思われる。

(9)「小皷」慷格児格 k^{h}aŋ kɛ ər kɛ /keŋgerge/ (文) kenggerge
「女児」斡勤 ·uɔ k^{h}in /ökin/ (文) ökin

(10)「明」格格延[22] kɛ kɛ ·iɛn /gegeyen/ (文) gegegen
「全」帖谷思 tiɛ ku sɿ /tegüs/ (文) tegüs

2.1.1.5 後部軟口蓋音

モンゴル文語は無声と有声の後部軟口蓋音をもつ。慣習的に無声音は q, 有声音は ɣ で転写される。『韃靼譯語』においても q, ɣ の2音をもつと仮定したい。『韃靼譯語』ではモンゴル文語の q, ɣ に対応する音はどちらも区別されずに暁母 x- で表されることが多い[23](11, 12)。

(11)「雨」忽剌 xu la /qura/ (文) qura
「鞴」脱忽 tuɔ xu /toqu/ (文) toqu

(12)「薤菜」豁豁孫 xuɔ xuɔ su(ə)n /yoɣosun/ (文) yoɣusun
「塔」速不児罕 su pu ər xan /suburɣan/ (文) suburɣan

しかし、閉鎖音声母によって表されている例も散見される。その場合、モンゴル文語の q に対応する音には渓母 k^{h}- が, ɣ に対応する音には見母 k- が用いられている(13, 14)。

(13)「竹」苦魯孫 k^{h}u lu su(ə)n /qulusun/ (文) qulusun
「遠」闊羅 k^{h}uɔ luɔ /qolo/ (文) qola

(14)「野雞」 古児敖 ku ər ·au /ɣurɦaul/ (文) ɣurɣuul
「神鬼」汪昆 赤科児 ·uaŋ ku(ə)n $tʂ^{h}$ɿ k^{h}uɔ ər /oŋɣun čitkör/
(文) ongɣun čidkür

---

[21] ü の前の k は見母 k-で表されることもある。
例:「女胥」古列干 ku liɛ kan /küregen/ (文) kürgen (秘) 古[舌]列干
用いられる漢字は‘古’ku のみであるが、この用法は『元朝秘史』でも頻繁に見られる。『元朝秘史』において‘古’が表すモンゴル語音については服部(1974)に詳しい。

[22] 中世の漢字音写文献において‘延’·iɛn がどのようなモンゴル語音を表したかについては異論がある。本稿では斎藤(1992)を参考にし、語頭では en, 語中では基本的に yen を表すものとした。

[23]『韃靼譯語』において qa, ɣa を表す最も一般的な漢字である‘蛤’の漢字音は「重訂司馬温公等韻図経」では ka であるが、この漢字が『韃靼譯語』においてモンゴル語の ha を表すためにも用いられることなどから、本稿では漢字音 xa と再構する。

このように漢字音写において区別されている例があるため、『韃靼譯語』における後部軟口蓋音に無声・有声の 2 音を立てても漢字音写との間に矛盾は生じない。したがって、暁母 x- が表す音を q, ɣ, 渓母 k^h- が表す音を q, 見母 k- が表す音を ɣ と再構したい。渓母 k^h- によって音写される q は 1 例[24]を除いて語頭に現れ、見母 k- によって音写される ɣ は語頭もしくは ŋ の後に現れる[25]。

また、モンゴル文語の ɣ に対応する位置にゼロ声母(·)が現れることもある。このようなゼロ声母が現れるのは母音間(15), 流音(l, r)の直後(16), ŋ の直後(17)である。

(15)「皇帝」蛤安 xa ·an /qafian/ (文) qaɣan (ハルハ[26]) χaaŋ
「湖」納兀児 na ·u ər /nafiur/ (文) naɣur (ハルハ) nuur

母音間に現れるゼロ声母が表す音としてはまず声門閉鎖音 ʔ が考えられるが、摩擦音である ɣ が閉鎖音 ʔ に変化する可能性は低いと思われる。次に、ゼロ声母が特定の音を表わさず、全体として長母音や二重母音の状態を表している可能性が考えられる。しかし、『韃靼譯語』の漢字音写において、長母音や二重母音が漢語の一音節で表されていると判断できる例がいくつも見られるため[27]、上記のようなゼロ声母を含めた二音節による音写は長母音や二重母音とは異なる状態を表していると予測される。また ɣ が弱化した音として w の可能性も考えられる。しかし、w であれば後述する(23)のように漢語の u によって表されるはずであるため、ゼロ声母を用いた上記の例は w とは考えにくい。残された可能性としては ɦ が考えられる。上記の(15)の例「皇帝」のモンゴル文語形は qaɣan であるが、『韃靼譯語』よりも早い時代に漢字音写された『元朝秘史』ではしばしば qahan(中合罕 xɔ xan)と音写され、現代モンゴル語ハルハ方言では χaaŋ となり長母音をもつ。つまり、ɣ が母音間において弱化して h となり、それが現代語において消失して長母音を形成している。『韃靼譯語』では h が完全に消失する前に有声化して ɦ となっていた可能性がある。本稿では、『韃靼譯語』の母音間のゼロ声母はこの ɦ の段階を表していると考えたい。

---

[24]「短」 斡闊児 ·uɔ k^huɔ ər /oqor/ (文) oqur (甲) 斡中闊児

[25] 語頭もしくは ŋ の後ろで見母 k- によって音写される ɣ は、音声的には閉鎖音 ɢ であった可能性が高い。

[26] 現代モンゴル語ハルハ方言の例における表記は基本的にキリル文字をローマ字転写したものである。本稿では、後舌母音の前で x (x)を χ, г (g)を ɢ と転写する。また音節末において н (n)を ŋ と転写する。

[27]「勇士」把禿児 pua t^hu ər /baatur/ (文) bayatur (ハルハ) baatar
「兎」討来 t^hau lai /taulai/ (文) taulai (ハルハ) tuulai

流音(l, r)の直後に現れるゼロ声母は以下の通りである。
(16)「緩」阿魯兀児 ʻa lu ʻu ər /alɣur/ (文) alɣur (ハルハ) alɢuur
「肥」塔児温 tʰa ər ʻu(ə)n /taryun/ (文) taryun (ハルハ) tarɢaŋ

このゼロ声母は ɣ を表していると仮定したい。ʔ と w は上記の母音間の場合と同じ理由から可能性が低いと思われる。また、ゼロ声母が何も表していないとすると上記の(16)の例はそれぞれ*alur, *taran と再構され、モンゴル文語や現代語の形式とかけ離れた形となってしまう。残された可能性としては ɦ と ɣ が考えられるが、母音間の場合と異なり現代諸方言においてɢ や ɣ といった後部軟口蓋音が現れるため、ɦ にまで変化が進んでいたとは考えにくい。したがって、『韃靼譯語』の流音に後続するゼロ声母は非常に弱化した ɣ を表したと考えたい。

ŋ の直後に現れるゼロ声母は以下の通りである。
(17)「韃靼」猛斡力 muŋ ʻuɔ li /moŋŋol/ (文) mongɣul (ハルハ) moŋɢol

このゼロ声母は、ɣ が直前の ŋ に鼻音同化した状態を表していると仮定したい[28]。(14)で見たように、ŋ の直後の ɣ は『韃靼譯語』においてゼロ声母以外に閉鎖音声母 k-によって表されることがあり、用例数は閉鎖音声母 k-が用いられる方が多い。この音は脚注 25 に記したように閉鎖音ɢであったと推測されるため、同じ環境でゼロ声母によって表された音も閉鎖をもつ音であった可能性が高い。このような音としては ɢ, ŋ, ʔ が考えられる。現代語において対応する位置に後部軟口蓋音 ɣ, ɢ が現れることから、調音位置の異なる ʔ は可能性が低いと思われる。残った可能性としては ɢ, ŋ の 2 音があるが、ここでは閉鎖音声母 k- が用いられる場合との違いを考慮して、ŋ を表していると考えたい。

2.1.1.6 喉音

『韃靼譯語』ではモンゴル文語における母音始まりの語の語頭が暁母 x- によって音写されることがある(18)。この暁母 x- によって表される音を h と仮定したい。

---

[28] ŋ に後続するゼロ声母が、ɣ から変化した ŋ を表す例は『畏兀児館譯語』でも見られる(庄垣内 1983：68)。
例:「猪」桶兀子 tʰuŋ ʻu tsɿ /toŋŋuz/ Wu. tuŋɣuz N.Uig. toŋɣuz, toŋguz

(18)「紅」忽剌安　xu la·an　/hulaɦian/　(文) ulaɣan　(ハルハ) ulaaŋ
(ダグル) xula:n　(東郷) xulan　(土族) fula:n　(保安) fulaŋ
「肝」黒里干　xɛ li kan　/heligen/　(文) eligen　(ハルハ) elgeŋ
(ダグル) xələg　(土族) xelge　(保安) hɛlgə　(東部裕固) heleɣe

このような語はハルハ方言に代表される現代モンゴル語では母音始まりである。しかし、いくつかの周辺諸言語においては摩擦音 x, h で始まっていることから[29]、上記のような『韃靼譯語』における暁母 x- も摩擦音 x もしくは h を表していると考えたい。『韃靼譯語』においては同じ語でも暁母 x- とゼロ声母の両方で表される場合があるため[30]、暁母 x- が表した音は当時、消失しつつあったと思われる。x と h では h の方が消失しやすいと考えられるため、『韃靼譯語』で暁母 x-が表した語頭の音を h と考えたい。

2.1.2 鼻音

モンゴル文語は m, n, ng の 3 つの鼻音をもつが、このうち音節初頭に立つのは m, n のみである。『韃靼譯語』においても音節初頭に立つ鼻音は m, n であると仮定したい。『韃靼譯語』ではモンゴル文語の m に対応する音は明母 m- によって表され(19)、n に対応する音は泥母 n- によって表されている(20)。明母 m-, 泥母 n- は他の漢字音写文献において、それぞれモンゴル語の m, n を表しているため、『韃靼譯語』でも明母 m- が表す音を m, 泥母 n- が表す音を n と再構したい。

(19)「肉」米罕　mi xan　/miqan/　(文) miqan
「八」乃蠻　nai muan　/naiman/　(文) naiman
(20)「日」納藍　na lan　/naran/　(文) naran
「你的」赤怒　tʂʰɿ nu　/činü/　(文) činü

2.1.3 流音

モンゴル文語は l, r の 2 つの流音をもつ。『韃靼譯語』も l, r をもつと仮定したい。『韃靼譯語』ではモンゴル文語の l と r に対応する位置に現れる音はどち

---

29 土族語、保安語において f で始まっている例があるが、これは x, h がそれぞれ u の前で f に変化したものと考えられる。

30「牧牛人」忽格児赤　xu kɛ ər tʂʰɿ　/hügerči/　(文) ükerči　(ハルハ) üxertʃ
「牛」兀格児　·u kɛ ər　/üger/　(文) üker　(ハルハ) üxer
上記の‘忽格児’と‘兀格児’はどちらも「牛」を表しているが、上の例では暁母 x-が、下の例ではゼロ声母が用いられている。「牧牛人」/hügerči/の či は「(〜する)人」を意味する接尾辞である。

らも来母 l- によって表されている(21, 22)[31]。このことから『韃靼譯語』の流音は l のみであった可能性が出てくる。しかし、これは音写に用いられた当時の漢語が r をもたなかったため、類似音の l でモンゴル語の r を表した結果であると考えられる。この音写方法は漢字音写文献全般に見られるので、『韃靼譯語』において来母 l- が表す音をモンゴル文語や現代諸方言に従って l, r と再構することは妥当であると思われる。

(21)「鴉鵲」剌臣　la tʂʰən　/lačin/　(乙) lačin
　「舌」克連　kʰɛ liɛn　/kelen/　(文) kelen
(22)「雨」忽剌　xu la　/qura/　(文) qura
　「馬」抹林　muɔ lin　/morin/　(文) morin

2.1.4 半母音

モンゴル文語は w, y の 2 つの半母音をもつ。『韃靼譯語』においても w, y をもつと仮定したい。『韃靼譯語』にはモンゴル文語の w に対応する音を表した例は存在しない。しかし、モンゴル文語の ɣ に対応する音が w で現れていると考えられる例が存在する(23)。この場合に用いられている漢字音はゼロ声母(·)＋u である。この u は母音の前に現れているため w を表していると考えたい。また、モンゴル文語の y に対応する音はゼロ声母(·)＋i によって表されている(24)[32]。この i は母音の前に現れているため y を表していると考えられる。

(23)「六」只児瓦安　tʂɿ ər ·ua ·an　/jirwaɦan/[33]　(文) jirɣuɣan
(24)「大」也克　·iɛ kʰɛ　/yeke/　(文) yeke
　「行」牙不　·ia pu　/yabu/　(文) yabu

また、u の前の韻尾-u は w を表し(25)、i の前の韻尾-i は y を表していると考えたい(26)。この w は、u, ü の前で ɣ, g が弱化したものであると思われる。

(25)「夕」毛温　mau ·u(ə)n　/mawun/　(文) maɣun
　「影」小兀迭児　siau ·u tiɛ ər　/sewüder/　(文) següder

31『元朝秘史』や華夷譯語甲種本では来母 l-で l を表し、来母 l-の漢字の左肩に‘舌’という補助記号をつけた形で r を表しているが、丙種本『韃靼譯語』においてそのような違いは見られない。この点は乙種本と同様である。

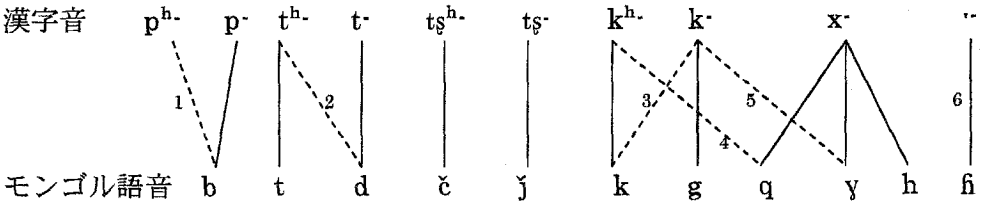
32 ゼロ声母(·)＋y によって yu が表されることもある：「怕」阿余　·a ·y　/ayu/　(文) ayu

33 モンゴル文語の ɣ に対応する音を r の後ろにおいてゼロ声母で表した例とも考えられるが、漢字音に介音 u があること、通常 r の後ろの ɣ をゼロ声母で表記しない甲種本においても‘只児瓦安’であることなどから、ここでは w を表しているとする。

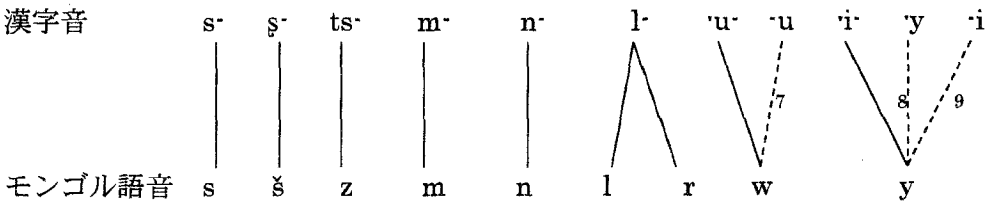
(26)「駝奶」愛亦剌 ·ai ·i la /ayiraɣ/ (文) ayiraɣ
「走」癸亦 kuei ·i /güyi/ (文) güyü (ハルハ) güi
「八十」乃延 nai ·iɛn /nayan/ (文) nayan

2.1.5 まとめ

『韃靼譯語』における漢字音とモンゴル語音節初頭子音の音写関係は以下のようにまとめられる。



[1]3例のみ [2]塔 tʰa [3]古 kü [4]1例を除いて語頭 [5]語頭, ŋ に後続
[6]母音間もしくは l, r, ŋ に後続



[7]u が後続 [8]yu を表す [9]i が後続

2.2 音節末子音

『韃靼譯語』において、モンゴル語の音節末子音は漢語の音節全体、韻尾、ゼロなどによって表されている。

2.2.1 阻害音

モンゴル文語において音節末に立つ阻害音は b, d, g, ɣ, s の 5 つである。『韃靼譯語』において音節末に立つ両唇音も b であると仮定したい。『韃靼譯語』ではモンゴル文語の音節末の b に対応する音は幇母 p- によって音写されている(27)。無気音声母によって表されていることから、『韃靼譯語』のもつ音節末両唇音を有声音 b とするのは妥当であると思われる。用いられている漢字は 1 例[34]を除き‘不’pu である。

---

[34]「匾」 蛤把塔孩 xa pua tʰa xai /qabtaɣai/ (文) qabtaɣai (甲)[中]合[八]塔孩

(27)「熟絹」乞不　kʰi pu　/kib/　(文) kib
「葉」納不陳　na pu tʂʰən　/nabčin/　(文) nabčin

『韃靼譯語』において音節末に立つ歯茎閉鎖音を、モンゴル文語と同様に d と仮定する。『韃靼譯語』ではモンゴル文語の音節末の d に対応する位置には漢字が記されていない(28)。このことから、モンゴル文語の d に当たる音が欠落していると考えられるかもしれない。しかし、現代諸方言でも音節末の歯茎閉鎖音が欠落した言語は見当たらないため、『韃靼譯語』における音節末の歯茎閉鎖音は、音写されていないが存在していたと推定される。『元朝秘史』、華夷譯語甲種本、乙種本といった他の漢字音写文献では有気音声母 tʰ- (惕 tʰi) で表されているため、音節末に立つ歯茎閉鎖音は音声的には無声であった可能性が高い。したがって、『韃靼譯語』のもつ音節末歯茎閉鎖音は仮定した d ではなく t と推定したい。
(28)「珠」速不＿　su pu _　/subut/　(文) subud　(甲) 速不惕
「飽」察＿把　tʂʰa _ pua　/čat-ba/　(文) čad-ba　(甲) 察惕八

『韃靼譯語』において音節末に立つ軟口蓋音を、モンゴル文語と同様に g と仮定する。『韃靼譯語』ではモンゴル文語の音節末の g に対応する音は渓母 kʰ- (克 kʰɛ) によって音写されるか(29)、もしくは対応する位置に漢字をもたない(30)。有気音声母 kʰ- を用いる音写方法から音声的には無声であったと考えられるため、『韃靼譯語』のもつ音節末軟口蓋音は仮定した g ではなく k と推定したい。
(29)「馬奶」額速克　·ɛ su kʰɛ　/esük/　(文) esüg
「與」斡克　·uɔ kʰɛ　/ök/　(文) ög
(30)「花」扯扯＿　tʂʰɛ tʂʰɛ _　/čeček/　(文) čečeg
「過」那＿赤　nuɔ _ tʂʰʅ　/nökči/　(文) nögči

『韃靼譯語』において音節末に立つ後部軟口蓋音を、モンゴル文語と同様に ɣ と仮定する。『韃靼譯語』ではモンゴル文語の音節末の ɣ に対応する音は暁母 x· (黑 xɛ, 蛤 xa) によって音写されるか(31, 32)、もしくは対応する位置に漢字をもたない(33)。音写に使用される声母が摩擦音であるため、音写された音が有声であったか無声であったかの推測は不可能である。ここでは暫定的にモンゴル文語と同じ ɣ と推定する。
(31)「時」察黑　tʂʰa xɛ　/čaɣ/　(文) čaɣ
「師傳」把黑失　pua xɛ ʂʅ　/baɣši/　(文) baɣši

(32)「焼肉」失剌蛤三 米罕[35] ʂl la xa san mi xan /širaɣsan miqan/
(文) širaɣsan miqan

(33)「泉」不剌__ pu la _ /bulaɣ/ (文) bulaɣ
「醉」莎__塔把 suɔ _ tʰa pua /soɣta·ba/ (文) soɣta·ba

『韃靼譯語』において音節末に立つ歯茎摩擦音をsと仮定する。『韃靼譯語』ではモンゴル文語の音節末のsに対応する音は心母s·(思sl) によって音写されている(34)。この‘思’slは他の漢字音写文献において常にモンゴル語の音節末のsを表すため、『韃靼譯語』においてもsを表すとしたい。
(34)「國」兀魯思 ·u lu sl /ulus/ (文) ulus
「飛」你思忽 ni sl xu /nis·qu/ (文)nis·qu

また、これらの他に審母ʂ·(失ʂl) が後部歯茎摩擦音š を表すと思われる例が存在する(35)。
(35)「玉」蛤失 xa ʂl /qaš/ (文) qas(i) (ハルハ) χas, χaʃ
(畏) 哈失 xa ʂl /qaš/
「果」者迷失 tʂɛ mi ʂl /ǰemiš/ (文) ǰemis (ハルハ) dʒims
(畏) 也密失 iɛ mi ʂl /yämiš/

モンゴル文語は音節末のš をもたず、上記のš に対応する位置にはほぼすべてsが現れる。また、現代モンゴル語(ハルハ方言)でもsが現れることが多い。上記の2語は丙種本『畏兀児館譯語』においてウイグル語として記されている(庄垣内 1983: 153, 124)。そこでの ʂl(失) がウイグル語のš を表していることから、上記の2語における ʂl (失) はウイグル語からの借用語に現れるš を表した可能性がある[36]。他の例には借用語であるかどうか判断が難しい語もあるため現段階では、『韃靼譯語』に表されたモンゴル語は音節末子音 š をもっていたが、徐々に失われてsが用いられるようになったと考えたい。このような例は他の漢字音写文献にも見られる。

2.2.2 鼻音

モンゴル文語はm, n, ngの3つの鼻音をもち、そのすべてが音節末に立つ。『韃靼譯語』においても音節末鼻音 m, n, ŋ をもつと仮定したい。『韃靼譯語』

---

[35] ‘蛤’ xa が音節末の ɣ を表すのは過去の形動詞語尾·ɣsan の場合に限られる。
[36] モンゴル文語のs表記は、借用した当時のウイグル語においてš とsが同じ文字で表記されていたために起こったと考えられる。

においてモンゴル文語の m に対応する音は韻尾-n によって表されている(36)。このことから、『韃靼譯語』には音節末の m は存在しなかったと考えられるかもしれない。しかし、現代諸方言においても音節末の m が見られることから、『韃靼譯語』のモンゴル語にも音節末の m が存在していたと考えるのが妥当である。韻尾-n が用いられているのは、当時の漢語に韻尾-m が存在せず、類似した韻尾-n によって m を表したためであると考えられる[37]。

(36)「葡萄」兀遵 ·u tsu(ə)n /üzüm/ (文) üǰüm (八) üdzem
「蓬」坎蛤温 kʰan xa ·u(ə)n /qamqaɦul/ (文) qamqaɣ (乙) qamqaɣul
(八) χamχag

モンゴル文語の n に対応する音は韻尾-n によって音写されている(37)。この韻尾-n は音節末の n を表していると考えられる。

(37)「三」忽児班 xu ər puan /ɣurban/ (文) ɣurban
「那里」田迭 tʰiɛn tiɛ /tende/ (文) tende

モンゴル文語の ng に対応する音は韻尾-ŋ によって表されている(38)[38]。この韻尾-ŋ は音節末の ŋ を表していると考えられる。

(38)「鑼」常 tʂʰaŋ /čaŋ/ (文) čang
「捜」能知 nəŋ tʂɿ /neŋǰi/ (文) nengǧi

2.2.3 流音

モンゴル文語は l, r の 2 つの流音をもち、どちらも音節末に立つ。『韃靼譯語』においても流音 l, r が音節末に立つと仮定したい。モンゴル文語の l に対応する音は来母 l-(39), 韻尾-n(40), 韻尾-n＋来母 l-(41), ər(42), 韻尾-n＋ər(43), ゼロ(44) によって表される。このうち用例数が多いのは来母 l-, 韻尾-n, ゼロである。韻尾-n によって音節末の l を表す音写方法が他の漢字音写文献にも頻繁に見られること、また音節末の l がゼロと対応している語が現代諸方言において音節末の l を欠落させていないことから、これらは『韃靼譯語』の音節末の l を表したと考えられる[39]。

---

[37]『韃靼譯語』よりも音写年代の古い『元朝秘史』では、音写に用いられた漢語に韻尾-m が存在していたため、韻尾-m によって音節末の m を表している(越智 2003: 38)。

[38] 例外的に ŋ を韻尾-n によって表したものが 1 例だけ存在する。
「一千」你干敏安 ni kan min ·an /nigen miŋŋan/ (文) nigen mingɣan

[39] ər もしくは韻尾-n＋ər によって表された音については再考の余地があるかもしれない。

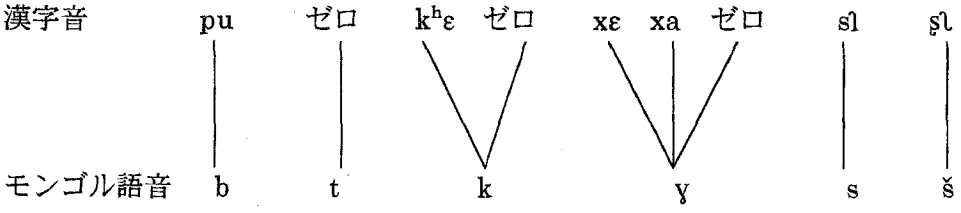
(39)「大紅」阿勒 ·a lɛ /al/ (文) al
「使臣」額里陳 ·ɛ li tʂʰən /elčin/ (文) elčin
(40)「冬」兀奔 ·u pu(ə)n /übül/ (文) ebül
「門扇」蛤安蛤 xa ·an xa /qaɦalɣa/ (文) qaɣalɣa
(41)「唾」紉勒不孫 nin lɛ pu su(ə)n /nilbusun/ (文) nilbusun
「方」朶児班勒真 tuɔ ər puan lɛ tʂən /dörbeǰin/ (文) dörbeǰin
(42)「鄉道」阿亦二 ·a ·i ər /ayil/ (文) ayil
「驢」額児只干 ·ɛ ər tʂʅ kan /eǰigen/ (文) eǰigen
(43)「一托」你干奄二塔 ni kan ·iɛn ər tʰa /nigen alda/ (文) nigen alda
「墻」板児阿孫 puan ər ·a su(ə)n /balɦasun/ (文) balɣasun
(44)「潭」扯額__ tʂʰɛ ·ɛ _ /čeɦeǰ/ (文) čegeǰ
「日斜」納藍克__擺把 na lan kʰɛ _ puai pua /naran keǰbei·be/
(文) naran keǰbeyi·be

モンゴル文語の r に対応する音はほぼすべて ər によって音写されている(45)。漢字音 ər はモンゴル語の r を表すために最も適した音であったと考えられるため、ər が表す音を r と再構する。ər の他に韻尾·n＋ər やゼロで音写された例も見られる(46, 47)。これらも r を表していると考えたい。韻尾·n＋ər によって r を表す音写方法は『畏兀児館譯語』でも見られ、漢語の r 化を用いた表記であると考えられている[40]。

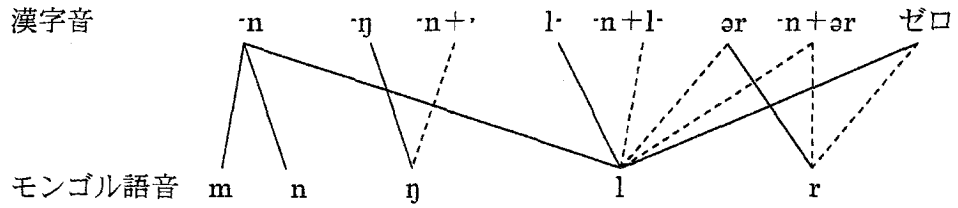
(45)「伴當」那可児 nuɔ kʰɔ ər /nökör/ (文) nökür
「岸」額児吉 ·ɛ ər ki /ergi/ (文) ergi
(46)「儜鶴」奄児孫 ·iɛn ər su(ə)n /arsun/ (文) arisu
(47)「粳米」禿禿__罕阿門 tʰu tʰu _ xan ·a mu(ə)n /tuturɣan amun/
(文) tuturɣan amun

2.2.4 まとめ

『韃靼譯語』における漢字音とモンゴル語音節末子音の音写関係は以下のようにまとめられる。



40「堤」肯児 kʰən ər / qïr / Wu. qïr (庄垣内 1983: 84)



3. 漢字音写によって表されるモンゴル語の母音

モンゴル文語にはi, e, a, u, ü, o, ö という7つの母音が存在する。『韃靼譯語』でも母音の種類は同じであると仮定したい。『韃靼譯語』においてこれらの母音は、漢語の韻母全体や韻尾を除いた部分によって表されている。

3.1 i

モンゴル文語のiに対応する音は『韃靼譯語』において漢字音i, ɿ, ə, iə によって表されている。具体的にはモンゴル文語の i(-n,-m,-l,-ng,-ü が後続する場合を除く)に対応する音が韻母i, ɿ によって表される。この場合、韻母iは声母が反り舌音以外の場合に現れ(48)、韻母 ɿ は反り舌音声母の場合に現れる(49)。これは、音写に用いられた漢語において反り舌音声母が韻母 i と結合した音節をもっていなかったことによる。

(48)「癡」蛤泥 xa ni /ɣani/ (文) ɣani
「指甲」乞木孫 kʰi mu su(ə)n /kimusun/ (文) kimusun

(49)「姐姐」額格赤 ·ɛ kɛ tʂʰɿ /egeči/ (文) egeči
「魚」只蛤孫 tʂɿ xa su(ə)n /ǰiɣasun/ (文) ǰiɣasun

また、モンゴル文語の in(im, il)に対応する音が韻母 in, ən によって、ing に対応する音が韻母 iŋ, əŋ によって表される。この場合、韻母 in, iŋ は声母が反り舌音以外の場合に現れ(50, 51)、韻母ən, əŋ は反り舌音声母の場合に現れる(52, 53)。これも上記と同じ理由による。

(50)「性命」阿民 ·a min /amin/ (文) amin
「薄」您干 nin kan /nimgen/ (文) nimgen
「一般」你干主因 ni kan tʂy ·in /nigen ǰüyil/ (文) nigen ǰüyil

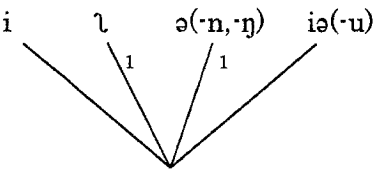
(51)「怒」奇令藍 kʰi liŋ lan /kiliŋlem/ (文) kilinglem
「茄子」把丁蛤 pua tiŋ xa /badiŋɣa/ (乙) badingɣa

(52)「使臣」額里陳 ·ɛ li tʂʰən /elčin/ (文) elčin
「緣故」申塔安 ʂən tʰa ·an /šiltaɦan/ (文) šiltaɣan

(53)「誠」呈 tsʰəŋ /čing/ (文) čing
「海青」升豁児 şəŋ xuɔ ər /šiŋqor/ (文) šingqur

また、モンゴル文語の iü に対応する音が韻母 iəu によって表される(54)。
(54)「仁」紐列思盌[41] niəu liɛ sɿ kʰuei /niülesküi/ (文) nigülesküi

基本的に漢字音 i が用いられ、i が使用不可能である場合には i にできるだけ近い音が選ばれているため、これらによって音写された『韃靼譯語』の母音は i であると推定する。『韃靼譯語』における漢字音とモンゴル語音 i の音写関係は以下のようにまとめられる。



3.2 e

モンゴル文語の e に対応する音は『韃靼譯語』において漢字音ɛ, iɛ, iuɛ, ə, ia, a, ua, u によって表されている[42]。具体的にはモンゴル文語の e(-n,-m,-l,-ng,-i,-ü が後続する場合を除く)に対応する音が韻母 ɛ, iɛ, iuɛ によって表される(55, 56, 57)[43]。それぞれの韻母が結合する声母は反り舌音・軟口蓋音・ゼロ声母＋韻母 ɛ, 両唇音・歯茎音声母＋韻母 iɛ, 声母 s＋韻母 iuɛというようにほぼ相補う関係にある。

---

41 実際は‘紉列思盌’となっているが、‘紉’nin は『韃靼譯語』では通常 nin, nil を表す漢字であるため、そのままではモンゴル語の語形と合わない。同じ語が甲種本において‘紐列思魁’となっていることから、『韃靼譯語』では‘紐’を‘紉’と誤写したと考えられる。

42 このほか、モンゴル文語の be に対応する音が‘伯’puai によって表される。この‘伯’の韻母については再考を要するかもしれない。
「難」伯児克 puai ər kʰɛ /berke/ (文) berke (甲) 別児客
「睡覺」雪列伯 siuɛ liɛ puai /sere-be/ (文) sere-be (甲) 薛禿里別

43 例外的に韻母 a, ua によって表されることもある。
「蚊子」孛可兀納 puɔ kʰɔ -u na /bököñüne/ (文) böküne, bükügene
「焼餅」兀禿麻 -u tʰu mua /ütümek/ (甲) 兀傷篾克
「覺了」雪列把 siuɛ liɛ pua /sere-be/ (文) sere-be
これらの漢字は通常 a を音写するために用いられている。‘把’pua が be を表すのは過去語尾-ba~-be の場合に限られる。

(55)「花」扯扯　tʂʰɛ tʂʰɛ　/čeček/　(文) čečeg
　「舌」克連　kʰɛ liɛn　/kelen/　(文) kelen
(56)「猴」別嗔　piɛ tʂʰən　/bečin/　(文) bečin
　「枕」迭列　tiɛ liɛ　/dere/　(文) dere
(57)「床」亦雪里　·i siuɛ li　/iseri/　(文) iseri

また、モンゴル文語の en(em, el)に対応する音が韻母 iɛn, an, uan によって表される(58, 59, 60)。声母と韻母の結合関係は複雑であるが[44]、結果的にほぼ相補分布をなしている。反り舌音声母は韻母 an のみと結合している。これは当時の漢語が反り舌音声母＋韻母 iɛn という音節をもたなかったことによると思われる。韻母 uan は両唇音声母のみと結合している。
(58)「一萬」你干土綿　ni kan tʰu miɛn　/nigen tümen/　(文) nigen tümen
　「光」格連　kɛ liɛn　/gerel/　(文) gerel
(59)「聰明」雪禪　siuɛ tʂʰan　/sečen/　(文) sečen
　「薬」諳　·an　/em/　(文) em
　「鞍」額箑安　·ɛ miɛ ·an　/emeɦel/　(文) emegel
(60)「班」朶児班　tuɔ ər puan　/dörben/　(文) dörben
　「大臣」也克土失慢　·iɛ kʰɛ tʰu ʂɿ muan　/yeke tüšimel/ (文) yeke tüšimel

モンゴル文語の eng に対応する音は韻母əŋ, aŋ, uŋ によって表される(61, 62, 63)。韻母əŋ は声母 tʰ-, n- と、韻母 aŋ は声母 l-, kʰ-, ·- と、韻母 uŋ は声母 m- とそれぞれ結合している。声母 m-と結合する韻母として uŋ が選ばれているのは、韻母əŋ, aŋ が両唇音声母と結合できないためであると考えられる。
(61)「天」騰吉里　tʰeŋ ki li　/teŋgiri/　(文) tngri　(ハルハ) teŋger
　「捜」能知　nəŋ tʂɿ　/neŋǰi/　(文) nengǰi
(62)「燕色」苦郎　kʰu laŋ　/küreŋ/　(文) küreng
　「小皷」慷格児格　kʰaŋ kɛ ər kɛ　/keŋgerge/　(文) kenggerge
(63)「醫」猛格　muŋ kɛ　/meŋge/　(文) mengge

モンゴル文語の ei(ey)に対応する音は韻母 ai, uai によって表される(64, 65)[45]。基本的に韻母 ai が用いられ、声母が両唇音の場合のみ韻母 uai が用いられる。
(64)「無」兀該　·u kai　/ügei/　(文) ügei
　「聾」都来亦　tu lai ·i　/düleyi/　(文) dülei

---

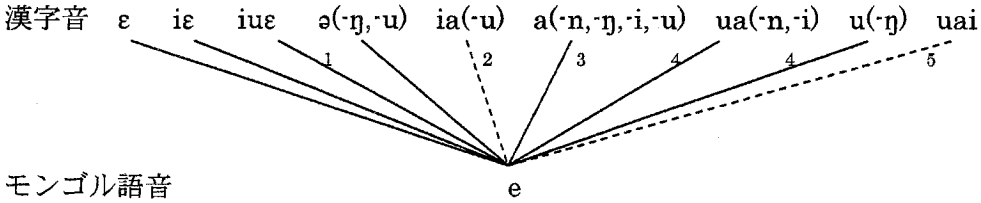
44 声母 m, tʰ, l, · ＋韻母 iɛn, 声母 t, n, l, tʂʰ, kʰ, k, · ＋韻母 an, 声母 p, m＋韻母 uan
45 例外的に‘克’kʰɛ によって kei が表されることもある：「風」克　kʰɛ　/kei/　(文) kei

(65)「日斜」納藍克擺把　na lan $k^h\varepsilon$ puai pua　/naran kelbei-be/
(文) naran kelbeyi-be

モンゴル文語の egü に対応する音は韻母əu, iau, au によって表される(66, 67, 68)。これらの韻母は egü から変化した eü, ew(ü) という音を表していると考えられる。韻母 au は反り舌音声母のみと結合している。

(66)「蝗」叉児格　ts^həu ər kɛ　/čeürge/　(文) čügürgene　(乙) čegürge
「小子」口看　k^həu k^han　/keüken/　(文) kegüken, keüken
(67)「為那般」挑兀伯児　t^hiau ·u puai ər　/tewüber/　(文) tegüber
(68)「荊」孛羅克朝　puɔ luɔ $k^h\varepsilon$ ts^hau　/börö kečeü/　(乙) böre kečegü
「夢」勺兀敦　tṣau ·u tu(ə)n　/jewüdün/　(文) jegüdün

多くの漢字音が用いられているが、基本的にε, iε, iuε, ə が用いられ、それらの音が使用不可能である場合にのみ他の音を使用していることから、これらによって音写された『韃靼譯語』の母音は e であると推定する[46]。『韃靼譯語』における漢字音とモンゴル語音 e の音写関係は以下のようにまとめられる。



[1]雪 siuε　[2]挑 t^hiau　[3]au は反り舌音声母と結合　[4]唇音声母と結合　[5]伯 puai

3.3 a

モンゴル文語の a に対応する音は『韃靼譯語』において漢字音 a, ua, iε によって表されている。具体的にはモンゴル文語の a(-n,-m,-l,-ng,-i,-u が後続する場合を除く)に対応する音が韻母 a, ua によって表される(69, 70)[47]。基本的に韻母 a が用いられ、声母が両唇音の場合は韻母 a と結合できないため韻母 ua が用いられている[48]。

---

[46] 開口度については再考の余地がある。
[47] 例外的に挑 t^hiau によって ta を表すことがある。
「他的」挑怒　t^hiau nu　/tanu/　(文) tanu
[48] 韻母 ua は声母 x-と結合することもある。
「牯牛」不花　pu xua　/buqa/　(文) buqa

(69)「日」納藍　na lan　/naran/　(文) naran
　「間」扎兀剌　tʂa ·u la　/ǰaɦura/　(文) ǰaɣura
(70)「虎」把児思　pua ər sɿ　/bars/　(文) bars
　「口」阿麻　·a mua　/ama/　(文) ama

モンゴル文語の an(am, al)に対応する音は韻母 an, uan, iɛn によって表されている(71, 72, 73)。基本的に韻母 an が用いられ、声母が両唇音の場合は韻母 an と結合できないため韻母 uan が用いられている。韻母 iɛn は‘奄’·iɛn に限られている[49]。

(71)「打」占赤　tʂan tʂʰʅ　/ǰančі/　(文) ǰančі
　「貪」蛤藍　xa lan　/qaram/　(文) qaram
　「門扇」蛤安蛤　xa ·an xa　/qaɦalɣa/　(文) qaɣalɣa
(72)「三」忽児班　xu ər puan　/ɣurban/　(文) ɣurban
　「八」乃蠻　nai muan　/naiman/　(文) naiman
(73)「脊」奄撒　·iɛn sa　/amsa/　(文) amsa
　「金」奄墮　·iɛn tʰan　/altan/　(文) altan

モンゴル文語の ang に対応する音は韻母 aŋ, uaŋ によって表されている(74, 75)。基本的に韻母 aŋ が用いられ、声母が両唇音の場合は韻母 aŋ と結合できないため韻母 uaŋ が用いられている。

(74)「鑼」常　tʂʰaŋ　/čaŋ/　(文) čang
　「鴛鴦」昂吉児　·aŋ ki ər　/aŋgir/　(文) anggir
(75)「額」莽来　muaŋ lai　/maŋlai/　(文) manglai

モンゴル文語の ai(ay)に対応する音は韻母 ai, uai によって表されている(76, 77)。基本的に韻母 ai が用いられ、声母が両唇音の場合は韻母 ai と結合できないため韻母 uai が用いられている。

(76)「狗」那孩　nuɔ xai　/noqai/　(文) noqai
　「好」賽因　sai ·in　/sayin/　(文) sayin
(77)「百雄」扎蛤里埋　tʂa xa li muai　/ǰaɣalimai/　(乙) ǰaɣalimai
　「立」擺亦　puai ·i　/bayi/　(文) bayi

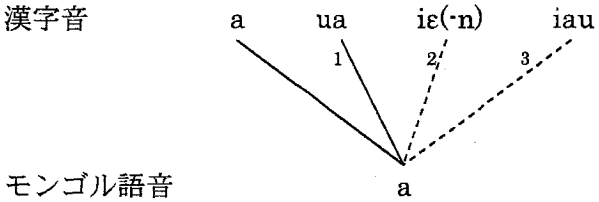
モンゴル文語の aɣu に対応する音は韻母 au によって表されている(78)。これは、aɣu から変化した au, aw(u) という音を表していると考えられる。

---

[49]‘奄’の漢字音は再考を要するかもしれない。

(78)「唱」倒剌 tau la /daula/ (文) dayula
「禽」失保温 ʂʅ pau ·un /šibawun/ (文) šibayun

基本的に漢字音 a が用いられ、a が使用不可能である場合にのみ ua を用いているため[50]、これらによって音写された『韃靼譯語』の母音は a であると推定する。『韃靼譯語』における漢字音とモンゴル語音 a の音写関係は以下のようにまとめられる。



1 唇音声母もしくは x-(花 xua)と結合 2 奄·iɛn 3 挑 tʰiau

3.4 u, ü

モンゴル文語の u に対応する音は『韃靼譯語』において漢字音 u, u(ə), ue, y, iu, e, əu によって表されている。具体的にはモンゴル文語の u(·n,·m,·l,·ng,·i が後続する場合を除く)に対応する音が韻母 u, y, əu によって表される(79, 80, 81)。韻母 y は反り舌音声母のみと結合し、韻母əu は副動詞語尾·ǰu を表す‘周’tʂəu に限られている。

(79)「指甲」乞木孫 kʰi mu su(ə)n /kimusun/ (文) kimusun
「瘦」土児罕 tʰu ər xan /turqan/ (文) turqan
(80)「厚」主札安 tʂy tʂa ·an /ǰuǰafian/ (文) ǰuǰayan
「舅舅」納蛤出 na xa tʂʰy /nayačʉ/ (文) nayačʉ
(81)「窺」失蛤周兀者 ʂʅ xa tʂəu ·u tʂɛ /šiya·ǰu üǰe/ (文) šiya·ǰu üǰe

モンゴル文語の un(um, ul)に対応する音は韻母 u(ə)n, iun によって表されている(82, 83)。韻母 iun は声母 l· のみと結合している。

(82)「五」塔奔 tʰa pu(ə)n /tabun/ (文) tabun
「丈母」蛤敦額克 xa tu(ə)n ·ɛ kʰɛ /qadum eke/ (文) qadum eke
「回回」撒児塔温 xa ər tʰa ·u(ə)n /sartafiul/ (文) sartayul
(83)「竈」豁倫塔 xuɔ liun tʰa /ɣolumta/ (文) ɣolumta

50 韻母 ua が声母 x·と結合する形は例外となる。

モンゴル文語の ung に対応する音は韻母 uŋ によって表されている(84)。
(84)「愚」蒙蛤　muŋ xa　/muŋqaɣ/　(文) muŋqaɣ
「渾」不籠吉児　pu luŋ ki ər　/buluŋgir/　(文) bulunggir

モンゴル文語の ui に対応する音は韻母 uei, ei によって表されている(85, 86)。韻母 ei は声母 l- のみと結合している。これは声母 l- が韻母 uei と結合できないためであると考えられる。
(85)「寛」阿未　·a ·uei　/aɦui/　(乙) aɣui
(86)「隨即」塔雷都児　tʰa lei tu ər　/daruj-dur/　(文) darui-dur

基本的に漢字音 u, u(ə), ue が用いられ、これらの音が使用不可能である場合に u と同じ狭母音が用いられていることから、これらによって音写された『韃靼譯語』の母音は u であると推定する。

モンゴル文語の ü に対応する音は『韃靼譯語』において、上記の u と同じ漢字音 u, u(ə), ue, y, iu, e, əu によって表されている[51]。具体的にはモンゴル文語の ü (-n,-m,-l,-i が後続する場合を除く)に対応する音が韻母 u, y, əu によって表される(87, 88, 89)。上記の u において韻母 y が反り舌音声母のみと結合しているのに対して、ü では反り舌音以外の声母とも結合している。韻母əu が副動詞語尾 ǰü を表す‘周’tʂəu に限られるのは u と同様である。
(87)「斧」速克　su kʰɛ　/süke/　(文) süke
「言」兀格　·u kɛ　/üge/　(文) üge
(88)「終末」額出思　·ɛ tʂʰy sɿ　/ečüs/　(文) ečüs
「種」許列　xy liɛ　/hüre/　(文) üre
(89)「帯着」者兀周　tʂɛ ·u tʂəu　/ǰeɦü-ǰü/　(文) ǰegü-ǰü

モンゴル文語の ün(üm, ül)に対応する音は韻母 u(ə)n, iun によって表されている(90, 91)。u と同様に韻母 iun は声母 l- のみと結合している。
(90)「生銅」失列門　ʂɿ liɛ mu(ə)n　/širemün/　(文) širemün
「葡萄」兀遵　·u tsu(ə)n　/üzüm/　(文) üǰüm
「冬」兀奔　·u pu(ə)n　/übül/　(文) ebül
(91)「自己」斡額倫　·uɔ ·ɛ liun　/öɦer-ün/　(文) öber-ün

---

51 例外的に‘克’kʰɛ によって kü が表されることがある。
「天陰」騰吉里不児乞克　tʰəŋ ki li pu ər kʰi kʰɛ　/teŋgiri bürki-kü/　(文) tngri bürkü-kü

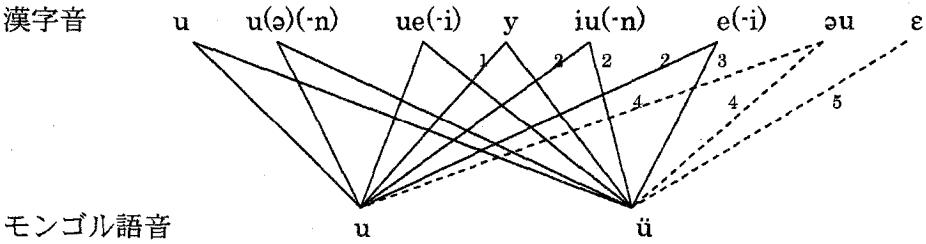
モンゴル文語の üi(üy)に対応する音は韻母 uei, ei によって表されている(92, 93)。韻母 ei は声母 p- のみと結合している。これは唇音声母が韻母 uei と結合できないためであると考えられる。

(92)「事」委列 ·uei liɛ /üile/ (文) üile
「未」兀堆亦 ·u tuei ·i /üdüyi/ (文) edüi

(93)「有」備 pei /büi/ (文) bui

基本的に u と同じ漢字音が用いられているが、u の場合に反り舌音声母のみと結合していた前舌円唇母音の y が u より広い範囲の声母と結合して使用されていることから、これらによって音写された『韃靼譯語』の母音は u よりも前舌の ü であると推定する。

『韃靼譯語』における漢字音とモンゴル語音 u, ü の音写関係は以下のように まとめられる。



[1]反り舌音声母と結合 [2]声母 l-と結合 [3]唇音声母と結合 [4]周 tʂəu [5]克 $k^hɛ$

3.5 o, ö

モンゴル文語の o に対応する音は『韃靼譯語』において、漢字音 uɔ, ɔ, ua, u, a によって表されている[52]。具体的にはモンゴル文語の o(-n,-ng,-i が後続する場合を除く)に対応する音が韻母 uɔ, ɔ によって表される(94, 95)。

(94)「水晶」孛羅児 puɔ luɔ /bolor/ (文) bolur
「近」斡亦剌 ·uɔ ·i la /oyira/ (文) oyira

(95)「栗」豁諾 xuɔ nɔ /qonoɣ/ (文) qonuɣ
「下雨」忽剌我羅把 xu la ·ɔ luɔ pua /qura oro-ba/ (文) qura oru-ba

---

[52] 例外的に韻母 au, iɛn によって表されることもある。
「志」勺里 tʂau li /ǰoriɣ/ (文) ǰoriɣ
「關」孛奄 puɔ ·iɛn /boɦiom/ (文) boɣum

モンゴル文語の on に対応する音は韻母 uan によって表されている(96)。
(96)「年」桓 xuan /hon/ (文) on
「譏笑」酸直 suan tʂʅ /sonǰi/ (文) sonǰi

モンゴル文語の ong に対応する音は韻母 uaŋ, aŋ, uŋ によって表されている(97, 98, 99)。韻母 aŋ は声母 l· と、韻母 uŋ は声母 m·, l· と結合している。これは声母 l· が韻母 uaŋ と結合できないこと、また声母 m· が韻母 uaŋ と結合することによって moŋ を表すことができず[53]、韻母 aŋ とも結合できないことによると考えられる。
(97)「神鬼」汪昆 赤科児 ·uaŋ ku(ə)n tʂʰʅ kʰuɔ ər /oŋɣun čitkör/
(文) ongɣun čidkür
(98)「肚帯」斡郎 ·uɔ laŋ /oloŋ/ (文) olung
(99)「韃靼」猛斡力 muŋ ·uɔ li /moŋŋol/ (文) mongɣul
「瓶」籠合 luŋ xa /loŋqa/ (乙) longqa

モンゴル文語の oi に対応する音は韻母 uai によって表されている(100)。
(100)「後」槐納 xuai na /qoina/ (文) qoyina

基本的に漢字音 uɔ, ɔ, ua が用いられているが、ua は uɔ, ɔ が使用不可能である場合に限られるため、これらによって音写された『韃靼譯語』の母音を o と推定したい[54]。

モンゴル文語の ö に対応する音は『韃靼譯語』において上記の o と同じ漢字音 uɔ, ɔ, ua, u と、o には用いられない uɛ, iuɛ によって表されている[55]。具体的にはモンゴル文語の ö (·n,·ng が後続する場合を除く)に対応する音が韻母 uɔ, ɔ, uɛ, iuɛ によって表される(101, 102, 103, 104)。韻母 uɛ は反り舌音声母と結合し、韻母 iuɛ は声母 s· と結合している。
(101)「脚」闊児 kʰuɔ ər /köl/ (文) köl
「伴當」那可児 nuɔ kʰɔ ər /nökör/ (文) nökür
(102)「凍」可児伯 kʰɔ ər puai /kör·be/ (文) körü·be

---

[53] 声母 m·+韻母 uaŋ は『韃靼譯語』において、moŋ ではなく maŋ を表すために用いられている。
[54] 開口度については再考の余地がある。
[55] o と同様に、韻母 au によって表されることもある。
「斜」勺里兀 tʂau li ·u /ǰöriñü/ (文) ǰörigüü

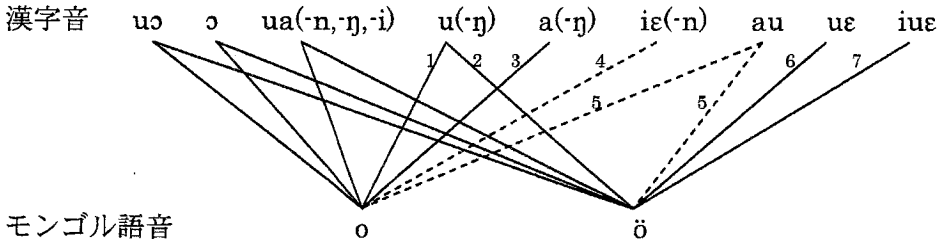
(103)「山川」啜勒　tʂʰuɛ lɛ　/čöl/　(文) čöl
(104)「夜」雪你　siuɛ ni　/söni/　(文) söni

上記の on と同様に、モンゴル文語の ön に対応する音は韻母 uan によって表されている(105)。
(105)「被」款只列　kʰuan tʂʅ liɛ　/könǰile/　(文) könǰile

上記の ong と同様に、モンゴル文語の öng に対応する音は韻母 uaŋ, uŋ によって表されている(106, 107)。韻母 uŋ が声母 m- と結合する点も ong と一致する。
(106)「輕」匡干　kʰuaŋ kan　/köŋgen/　(文) könggen
(107)「銀」蒙昆　muŋ ku(ə)n　/möŋgün/　(文) mönggün

基本的に o と同じ漢字音が用いられているが、o を表すために用いられていない uɛ, iuɛ が使用されていることから、これらによって音写された『韃靼譯語』の母音は o よりも前舌の ö であると推定する。

『韃靼譯語』における漢字音とモンゴル語音 o, ö の音写関係は以下のようにまとめられる。



1 声母 l, m と結合　2 声母 m と結合　3 声母 l と結合
4 奄ɪɛn　5 勺 tʂau　6 反り舌音声母と結合　7 雪 siuɛ

4. 『韃靼譯語』モンゴル語の特徴

4.1 漢字音写の特徴

- q, ɣ は基本的に摩擦音声母 x- によって音写されるが、その他に語頭に現れる場合に閉鎖音声母 kʰ-, k- で音写されることがある。q, ɣ は漢字音写においては区別されないと考えられてきたが、『韃靼譯語』において閉鎖音声母

によって表される場合には、有気音声母 k^{h}- →q, 無気音声母 k- →ɣ という区別がなされる。

- 音節末子音 t, k, ɣ, l が音写されていない例が多く見られる。この点は『元朝秘史』、華夷譯語甲種本、乙種本における音写方法と異なる。

- 韻母における音写の例外は文法的な語尾に多く見られる。

<過去語尾-be>

(108)「覺了」雪列把 siuɛ liɛ pua /sere-be/ (文) sere-be

「到」古児伯 ku ər puai /kür-be/ (文) kür-be

<副動詞語尾-ǰu~-ǰü>

(109)「窺」失蛤周兀者 ʂɿ xa tʂəu ·u tʂɛ /šiɣa-ǰu üǰe/ (文) šiɣa-ǰu üǰe

「帯着」者兀周 tʂɛ ·u tʂəu /ǰeñü-ǰü/ (文) ǰegü-ǰü

<形動詞語尾-kü>

(110)「天陰」騰吉里不児乞克 t^{h}əŋ ki li pu ər k^{h}i k^{h}ɛ /teŋgiri bürki-kü/ (文) tngri bürkü-kü

- 同じ単語が複数の項目に現れる場合、甲種本, 乙種本と共通する項目では甲種本,乙種本に近い表記がなされ、『韃靼譯語』独自の項目では異なる表記がなされることがある。

(111)「寒」濶亦田 k^{h}uɔ ·i t^{h}iɛn /köyiten/ (文) küiten, küitün (甲) 濶亦田

「冷」奎團[56] k^{h}uei t^{h}uan /küitön/ (文) küitün, küiten

(112)「粥」不塔安 pu t^{h}a ·an /budaañan/ (文) budaɣan (甲) ト荅安

「飯」不塔 pu t^{h}a /budaa/ (文) budaɣan (ハルハ) budaa

4.2 モンゴル語の特徴

- 借用語に限って用いられる z 音(声母 ts- によって音写される)が存在する。他の漢字音写文献でも z 音を音写したと考えられる例が見られる。

- モンゴル文語において母音間に現れる ɣ と流音に後続する ɣ に当たる音が弱化していることがある。母音間の ɣ の弱化は『元朝秘史』、甲種本、乙種本などでも一般的に見られる現象であるが、流音に続くɣ の弱化は『韃靼譯語』特有のものである。また、ŋ に続くɣ の鼻音同化も『元朝秘史』

56 甲種本、乙種本における「冷」には別の単語(拙延 ǰo'en)が当てられている。

等では見られない。

- 語頭の h が存在する。これは他の漢字音写文献においても同様である。

- モンゴル文語における音節末の d, g に当たる音が無声化している。これは他の漢字音写文献にも共通して見られる現象である。

- モンゴル文語において o, ö は第一音節にしか現れないが、『韃靼譯語』では第二音節以降にも現れている。これは他の漢字音写文献においても同様である。

(113)「海青」升豁児　ʂəŋ xuɔ ər　/šiŋqor/　(文) šingqur
(甲) 升豁児　(ハルハ) ʃoŋχor
「伴當」那可児　nuɔ k^hɔ ər　/nökör/　(文) nökür
(甲) 那可児　(ハルハ) nöxör

5. おわりに

本稿では、華夷譯語丙種本『韃靼譯語』における漢字音写体系を示すことによって、音写されたモンゴル語の特徴を導き出すことを試みた。その結果、『韃靼譯語』における漢字音写方法は、基本的には中世モンゴル語を表した他の漢字音写文献と同じであり、表されているモンゴル語にも大きな差異は見られないということが明らかになった。しかし、音節末子音 t, k, ɣ, l がしばしば音写されない点、流音に後続する ɣ の弱化や ŋ に後続する ɣ の鼻音同化が表されている点、漢語の r 化を用いている点など『韃靼譯語』に特有の表記も見られた。これらの表記法から、『韃靼譯語』の漢字音写はモンゴル文字を介して人工的に作りあげられたものではなく、調査者が聞き取ったモンゴル語音を調査者自身の持っている漢字音体系を用いて自然に表したものであるということが言えるだろう。このような性格をもつ『韃靼譯語』が中世モンゴル語の再構において果たす役割は大きいと考えられる。

参考文献

馮蒸　1981　「“華夷譯語”調查記」『文物』第 2 期 57-68. 北京: 文物出版社.
服部四郎　1974　「『元朝秘史』における「古温」<<人>>という語について
----秘史蒙古語音再構の方法に関して----」
『宇野哲人先生白寿祝賀記念　東洋学論叢』815-828. 東方学会.
石田幹之助　1931　「女真語研究の新資料」『桑原博士還暦記念東洋史論叢』
1271-1323. 桑原博士還暦記念祝賀会編. 京都: 弘文堂.
石田幹之助　1944　「所謂丙種本『華夷訳語』の「韃靼館訳語」」
『北亜細亜学報』第 2 輯 35-87.
栗林均編　2003　『『華夷譯語』(甲種本) モンゴル語　全単語・語尾索引』
仙台: 東北大学東北アジア研究センター.
Lessing Ferdinand D.　1960　*Mongolian-English Dictionary.*
University of California Press. Berkeley and Los Angeles. California. Cambridge University Press. London. (1995: Third re-printing by The Mongolia Society)
李珍華・周長楫編　1998　『漢字古今音表 (修訂本)』 北京: 中華書局出版.
陸志韋　1947　「記徐孝<<重訂司馬温公等韻図経>>」『燕京学報』第 32 期
169-196. (再掲 1988 『陸志韋近代漢字音韻論集』54-84. 北京: 商務印書館.)
寧継福　1982　『中原音韻表稿』 長春: 吉林文史出版社.
越智サユリ　2003　「『元朝秘史』モンゴル語の音韻に関する研究」
京都大学修士論文.
小澤重男　1994　『元朝秘史』 東京: 岩波書店.
小沢重男編　1994　『現代モンゴル語辞典 改訂増補版』 東京: 大学書林.
斎藤純男　1992　「『元朝秘史』で「延」によって表された中期モンゴル語の
音節について」『言語研究』第 101 号 1-13. 日本言語学会.
庄垣内正弘　1983　「『畏兀児館譯語』の研究----明代ウイグル口語の再構----」
『内陸アジア言語の研究』 I　51-172. 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.
孫竹主編　1990　『蒙古語族語言詞典』 西寧: 青海人民出版社.
楊耐思　1981　『中原音韻音系』 北京: 中国社会科学出版社.

Phonology of middle Mongolian in 'Da-da yi-yu'

OCHI Sayuri

Abstract

This paper is concerned with the phones of middle Mongolian transcribed by Chinese characters in the glossary『韃靼譯語(Da-da yi-yu)』. This text is the Mongolian part of the type 丙 of the glossaries「華夷譯語(Hua-yi yi-yu)」in which words of Chinese were contrasted with those of some foreign languages in Ming and Qing dynasties.『韃靼譯語』was written for interpreters to study the Mongolian language. So it is expected that the phones of colloquial Mongolian were described more naturally in this text than in the other texts.

In this paper, we reconstructed the phones of middle Mongolian in『韃靼譯語』and revealed the system of transcription using the phones of Chinese in『重訂司馬温公等韻図経』written in 1606. Consequently we found the following features peculiar to『韃靼譯語』.

(i) t, k, ɣ, l at the end of syllables are not transcribed frequently.
(ii) ɣ preceded by l, r and ŋ is often transcribed by a Chinese consonant zero(影母).
(iii) The phone ər of Chinese is used for the transcription of liquids.

These features show that the author of『韃靼譯語』heard the phones of colloquial Mongolian and transcribed them naturally using the phones of his own Chinese, not artificially through written Mongolian.

(受理日 2004年6月30日 最終原稿受理日 2004年12月21日)